群教セ	I01 － 01
	平18.238集

学習時に不安な様子を見せる児童Ａが、生活に活かせる力を高めるための指導

― 絵本を使った活動を軸として ―

特別研修員　　渡根木　悦子　（前橋市立細井小学校）

《研究の概要》

本研究は、学習するときに不安な様子や拒否的な言葉が多いＡが、楽しんで意欲的に取り組めるように生活単元学習の単元構成を工夫し、その中に社会に出てからも必要な知識やマナーを学ぶ要素を盛り込み、生活に活かせる力として高めていくことをねらいとした実践である。絵本を使った一斉の学習を軸として、それを支える教科の学習とより豊かに広げる体験学習を関連させることで、Ａの取り組む姿勢や算数の学習面で変容が見られた。

Ⅰ　主題設定の理由

自閉症児であるＡは、特殊学級に在籍する児童である。ひとつの活動が15分ともたなかった２年生の頃から少しずつ成長し、５年生の今では、葛藤しながらも机に向かって学習に取り組めることが増えてきた。しかし、泣き出したり乱暴な言葉を叫んだり、前には取り組めていた活動でも拒否したりすることがまだ見受けられる。

そんなＡの様子から、Ａに合った活動を設定し、一定期間テーマをもって取り組み、楽しく活動していく中で、社会に出てから必要な知識やマナーを身に付けさせることはできないだろうかということが課題となっていた。

以前に取り組んだ、劇遊びや買い物学習には興味を示し、その中で守れるようになった順番やじゃんけんのルールは、その後の生活の中でも守れるようになった。

また、学習で使った絵本を取り出して見るようになってきた姿もあったことから、絵本を使った学習をすることで、より絵本の世界を楽しみ、絵本に親しむ姿を願いながら、「絵を見る。想像する。」という面を刺激してみようと考えた。

さらに、絵本を使った生活単元学習を軸に、教科の学習や体験学習を組み合わせ、社会に出てからも必要となる要素を盛り込んで単元を構成してみることを考えた。教科の学習で身に付けたことを、生活単元学習の中でより確かなものにし、体験学習を通して生活に活かせる力として高めていくことができるように関連させる。そのようにしてできることを増やし、自立へと導いていくことは、社会へ出てからの生きる力へも結びついていくと考えたからである。

単元として選んだ絵本「いろいろないちにち」（中村まさあき　作　文化出版局　1989年）は、児童が身近に感じることができる商店や、駅、交番、幼稚園、病院と、そこで暮らす家族や人々の一日をページごとに移り変わる時刻と共に、絵だけで表現している。発見の面白さやストーリー、時の流れを感じることのできるものである。

身に付けさせたい力としては、金銭、時計の読み方、時間の認識、10の補数の考え方、助詞や言葉の正しい使い方、文を話すこと書くこと、公共の場所でのマナーなどの要素を取り上げた。そして、絵本の世界で楽しみながらこれらの力を身に付け、体験を通して実際の生活の中でも活かせる力として高めていくことをねらいとした。

社会に出ていくことを考えて、このような形で単元を構成すること、教科の学習→生活単元学習→教科の学習→生活単元学習の繰り返しの中で楽しさや学習に対する意欲をもたせ定着を図ることは、Ａ一人だけではなく、学級のどの児童にとっても一人一人の実態に合わせて、学習の活動を広げ、目標や方法に柔軟に対応できる教材としての価値をもつと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

Ａが､絵本を使った学習を軸とした活動により、楽しみや意欲をもって授業に取り組めるようになるとともに、金銭、時間、数、言葉・文、マナーなどについて生活に活かせる力に高める。

Ⅲ　研究の見通し

1　絵本を使った生活単元学習を軸に教科の学習や体験学習を組み合わせることで、学習に対して意欲的に取り組めるようにする。

2　生活単元学習では模擬体験を取り入れたり、映像を利用したりすることで、より現実に近い場面で考えることができるようにする。

3　生活単元学習や教科の学習を関連させたり、学習内容を繰り返したりすることで、学習内容の定着を図り、それを体験学習や生活の場面に活かせるようにする。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

絵本を使った生活単元学習の繰り返しを軸として、学習内容の定着を図る教科の学習と、より豊かに柔軟に活動を広げ興味や関心を引き出し、実体験を通して力を高める体験学習を組み合わせる。これらを相互に関連させ、学習の内容を高めることで、児童にとって学習したことが生活に活かせる力となり、生きる力を身に付けていくことを目指す。（図１に研究の全体構想図を示す）

(1)　生活に活かせる力とは

教室でのプリントの学習や活動の中ではできていても､実際の生活で場面やパターンが変わると、今までできていたことができないことがある。そこで、実際の生活場面で、金銭、時間、数、言葉・文、マナーについての既習内容が使えたり、守れたりすることを､生活に活かせる力ととらえる。

(2)　生きる力とは

特別な教育的支援を必要とする児童が、学習の中で、生活に必要な金銭、時間、数、言葉・文、マナーなどにおいて生活に活かせる確かな力を身に付け、マナー・協力・協調などにおいて、より豊かなコミュニケーションの仕方を身に付けることにより、豊かな人間性を培うことを目指す。そして、社会の中で生活するときに自分一人でできることを少しでも増やし、人とかかわりながら自立していけるようになることを生きる力が身に付いたと考える。

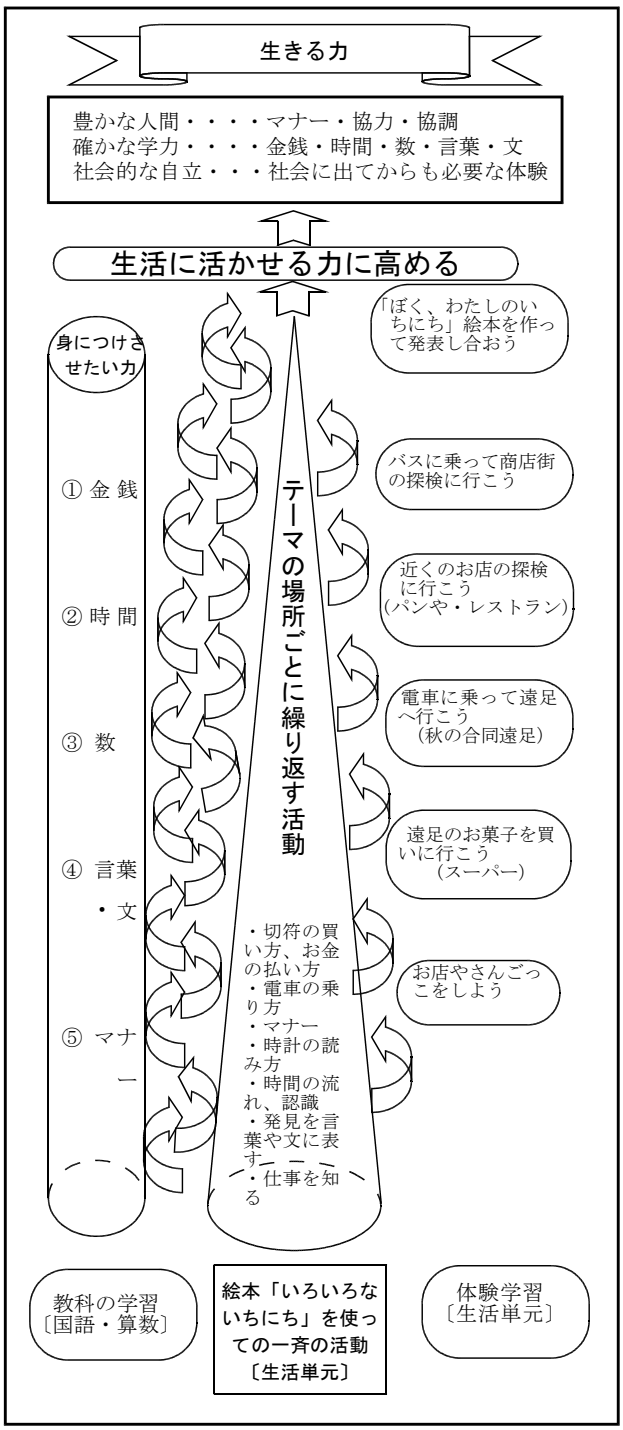

図１　全体構想図

(3)　絵本を使った一斉の学習とは

切符を買って電車に乗って、絵本「いろいろないちにち」の世界の「ありそ町」へ出かけるという設定で行う。その日のテーマの場所について時刻とともに移り変わる人々の生活の様子を見つ

め、見付けたことを言葉や文などで表現しながら味わう。また、文を書いた後に、その場所や仕事に関連する動画を見て、絵本との共通点を考え、身近な社会に興味をもたせる。

生活に活かせる力（金銭、時間、数、言葉・文、マナー）を盛り込みながらテーマの場所ごとに取り上げ、変化のある繰り返しを重ねる中でこれらの力の定着を図ることをねらう。児童にとっては、とりあげる場所の変化はあるものの、絵のどこに視点を当てて見ていけばよいのか分かるようになる。そのために学習の流れにも見通しがもて、楽しんで取り組むうちに、意欲的に取り組むことができるようになると考える。

(4) 教科の学習とは

児童の実態には個人差があるために、金銭、時間、数、言葉・文の学習については、プリント学習やコンピュータを使った学習で、それぞれの実態や目標に合わせた個に応じた指導を行う。個に応じた対応で、見通しがもてたり、できる場面が増えたりすることにより学習に対する抵抗感や不安の解消、学習内容の定着を図り、絵本を使った一斉の学習のより一層の充実を目指す。

(5) 体験学習とは

児童の興味や意欲をさらに引き出し、絵本で見た世界を、実際の世界と結びつけて考え、絵本を見る時には体験を思い起こして想像しながらより豊かに味わえるようにする。また、これまで学習してきたことを実際の生活で活かせるようになるためのステップとする。

Ⅴ 研究の展開

1 単元名

「電車に乗ってありそ町の探検に行こう」

2 目標

- 10円・50円・100円を使って、金額によって必要な硬貨が出せ、おつりを考えることができる。
- 生活の中で、時計が読め、時間の感覚がもてる。
- 必要な単語や助詞を使って、言葉や文を正しく表そうと意識できる。
- 公衆の前でしてはいけないこと、望ましい姿が分かり、実行できる。
- 学習に対して興味もって、意欲的に取り組める。
- 身近な社会に興味をもち、人は仕事をしたお金で生活していることを知る。
- 絵本を楽しんで見る。

3 単元の指導計画（合計116時間）

教科の学習（計39時間）

A「金銭」（18時間）
- 丁度の払い方（硬貨、コンピュータ）
- 100円で買えるものとおつり
- 50円で買えるものとおつり
- 150円で買えるものとおつり
- 100円と50円で必要な硬貨

B「10の補数」（10時間）
- ○と○で10
- 10は○と○
- 合わせて10
- 10円玉10枚で応用

C「時間」（5時間）
- 午前、午後
- 何時何分
- 時間の流れ、感覚
- 日常生活での時刻の意識

D「言葉、文」（6時間）
- 主語、述語、助詞
- 文の組み立て
- 正しい表記の仕方

生活単元学習（絵本を使った学習）（計48時間））

教科との関連		主な学習活動	体験との関連
電車に乗って、ありそ町の探検に行こう			
A、B	2×14	1．電車の乗り方・お金の払い方を学ぶ	③④⑤⑥
C、D		2．テーマの場所を探検する	①
D		3．テーマの場所や仕事に関する動画を見る	②③⑤⑥
C、D		4．その日一日のストーリーを通して読む	①
C、D	14	5．学習したところをペーパークラフトで作る	②③

※テーマの場所ごとにこれらの活動を繰り返す

C、D	6	6．体験活動を振り返りながら絵本「いろいろないちにち」を見て、新たに発見したことを話し合う	②

生活単元学習（体験学習）（計29時間）

- ⑥「ぼく、わたしのいちにち」絵本を作って発表し合おう（8時間）
- ⑤バスに乗って商店街の探検に行こう（5時間）
- ④近くのお店の探検に行こう（パンや、レストラン）（4時間）
- ③電車に乗って遠足へ行こう（秋の合同遠足）（6時間）
- ②遠足のお菓子を買いに行こう（スーパー）（２時間）
- ①お店やさんごっこをしよう（収穫物の販売）（４時間）

Ⅵ　指導の実際と考察

1　絵本を使った学習の取組

(1)　指導に当たっての留意点

ア　視覚

絵本を見る時には、１ページの情報量が多いので、視点を絞りやすくするためにテーマの場所ごとに切り取る。それを拡大して個人用のミニ絵本を作り、左ページにある絵を見て、右のページに見付けたことを文に書かせる。

また、テーマの場所の画像を、時刻が変わるごとにプロジェクタで拡大して投影することで、児童が共通のものとして理解するときの助けとする。画像が大きくなればなるほど等身大に近づき、自分がその世界に入っていくような気持ちになり、印刷では見づらかった細かい部分が、拡大することでよりはっきりと分かり、物語に入りやすく発見の手助けとなるようにする。

イ　模擬体験

興味や関心をもたせると同時に、より実際に近い場面で考えたり、行動したりすることができるようにするために､以下のような場面を設定する。電車の学習では「休憩コーナー」のソファを電車の座席に見立てて、模擬体験を行い、実際の体験へのステップとなるようにする。

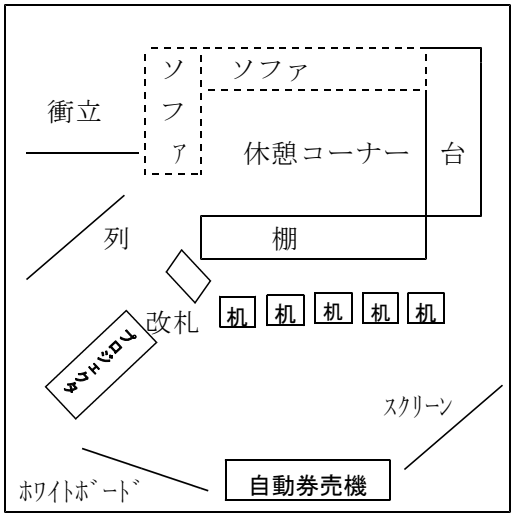

図２　場面の設定

ウ　映像の利用

絵で見る世界と、実際の世界の仲立ちとして、動画を活用する。電車に乗る模擬体験では、電車がホームに入ってくる様子や車窓の映像を流し、実際に近い感覚をもたせる。絵本で見た画像を実際に動くものとして見ることで、実際の世界との関連に気付きながら想像できるようにさせる。絵本を使っての学習と実際の体験での学習のギャップを少なくし、学習したことが、体験の中でスムーズに活かせるようにする。

(2)　Aの変容と考察

１学期の最初の頃のＡは、学習に対する拒否の言葉や葛藤している様子の伝わる言葉を毎時間繰り返し口にしていた。絵本を使っての学習を始めた初日には全くそのような言葉を口にすることなく取り組み、その後も少ないまま取り組むことが続いた。また、「教えて」「がんばる」といった自分からやろうとする気持ちを表す言葉が聞けるようになってきた。

絵本を使っての学習の繰り返しの中で、書く活動のやり方が分かってくると、自分から見付けたことを発言し、確認しながら進められるようになった。書いている途中では、「先生書いてるよ。」「先生がんばってるよ。」とよく言い、書き上がると「ヤッホー」「うれしい」など仕上がったことに対する喜びの言葉を発していた。

電車の学習では、休み時間に準備を始めていると、一緒に机や椅子を移動させて、１番先に席について皆を待っていることもあった。

担任の出張や児童の欠席で授業ができないときに、「ありそ町いつ行くん？」と聞きにきて、帰る時にもよく「明日、ありそ町行く？」と聞くようになり、楽しみにしている様子が伺えた。

以前は、チャイムがなるたびに、「休み時間だ。ブランコとられちゃう。」と騒いでいたが、今では２時間続きの学習の途中でチャイムがなっても、何も言わずに最後まで集中して取り組めるようになっている。そして、この学習の中のどの活動でもまじめに取り組み、真っ先に課題を仕上げた。仕上がったミニ絵本を14冊束ねて製本した時にも、うれしそうに「うち持って帰るん？冬休みに家で見る。」と言っていた。

以上のことから、絵本を使った活動を取り入れたことで、Ａの葛藤が減り、意欲的に取り組めるようになってきたということが言える。

写真1　14冊のミニ絵本

写真2　合本と自分の一日絵本

2　教科の学習についての取組

生活単元学習や体験学習との関連については以下の表１、表２の取組の欄に示す。

絵本を使った生活単元学習、体験学習、教科の学習をうまく結びつけることができた金銭や数、時計、マナーの面については、必要な硬貨を使いおつりが暗算でできるようになったり、生活の中で時計が読め、意識できるようになってきたり変容を見ることができた。生活に活かせる力に高まってきたということが言える。（数、時計、マナーについては資料３・４・５参照）最初はＡをはじめどの児童も、生活単元学習と教科の学習がすぐには結びつかなかったが、「楽しかった。また、やりたい。」という気持ちで、変化のある繰り返しの中で教科の学習と生活単元学習を繰り返していくうちに、結びつきを感じ、それぞれの力が高まっていったところで、体験学習の場で活かすことができるようになったと考える。

表1　金銭における取組

	金　　銭					
ねらい	①10の補数を利用して100円のおつりの考え方ができる。 ②150円までの買い物で、50円、100円、150円で必要な硬貨を出せ、おつりも考えられる。 ③体験学習で自動販売機や券売機、買い物等で使えるようになり、普段の生活でも使えるようになる。					
方針	・教科の学習では品物の絵に金額を書き、正しく買えた物に色を塗ることを繰り返すことで意欲をもたせる。 ・パターンにはまらずに、自分で考えられるように毎時間、児童の目標によって品物の金額を変える。 ・絵本を使った学習では、実際の生活に活かせるように本物の券売機の写真を貼り段ボールで作った自動券売機の模型を使用する。 ・実際の生活で活かせるように、硬貨や切符は本物を使用する。 写真3　自動券売機の模型 写真4　買い物学習プリントの一部					
取組	教科の学習		生活単元（絵本）		体験学習	
		（買い物学習）		（自動券売機で切符を買う）		
	9/12～22	①100円で買える物とおつり１ 〔50円硬貨1, 10円硬貨5〕	9/20～22	・丁度払う （110円・130円）	11/2	・職員室で収穫物の落花生の販売。 一袋10円を50円で支払ってもらいおつりを考える。（お店やさんごっこをしよう）
	9/25～28	②100円で買える物とおつり２ 〔100円硬貨１枚〕 ・10の補数を利用	9/26	・100円払っておつりを考える （90円・80円）	11/7	・遠足へ持っていくお菓子を150円で買えるものを選ぶ。（遠足のお菓子を買いに行こう）
	10/10～19	③130円持っていると買える物とおつり 〔100円硬貨1､10円硬貨3〕	10/2	・150円持って、130円の支払い	11/10	・遠足へ行く時に、自動券売機で切符を買う。 （電車に乗って遠足へ行こう） （110円） 行き 150円支払いおつりをもらう。 帰り 丁度に支払う。
		④50円・100円・150円で買える物とおつり 〔100円硬貨1, 50円硬貨1〕 ・50円・100円の両替	10/10～16	・130円や150円持って、100円硬貨で支払う金額		
			10/17～25	・150円持って、100円硬貨か50円硬貨で支払う金額		・遠足へ出かけた時に自動販売機でジュースを買う。 150円で130円の支払い
	10/19～11/29	⑤50円・100円どちらのお金を払う？ 〔100円硬貨1, 50円硬貨1〕	10/26～12/1	・150円持って、150円、100円硬貨、50円硬貨のどれかを支払う金額		
Ａの変容と考察	指導前	・10の補数も100円を出してのおつりも最初は分からない状態。 ・10円・50円・100円を使って丁度のお金を払うことができる。 ・50円を出した方がいいときと100円を出した方がいいときは分からない。				
	Ａの取組の様子	・教科の買い物学習の初回には、「何だこれ。全然難しいよ。勉強好きじゃないよ。」「何だこりゃ。難しいプリント嫌い。」「勉強嫌いなんだよ。俺は」と言っていた。ある程度繰り返し、できるようになってくると「何買おうかな。」「分からなかったら教えてよ。」「早く教えてよー。」と拒否や葛藤の言葉が少なくなり、やろうとする気持ちの見える言葉を言うようになってきた。 ・100円を持っていると買える物、100円を出してのおつりが暗算でできることが予想より早くできるようになり、50円も導入したところ、混乱する様子が見えた。再び、「言うと頭痛くなちゃう。」「俺は難しい勉強は嫌いだ。」と叫んでいた。しかし、翌日には「勉強やったら気持ち悪くなるけどがんばるぞ。」と言いながら取り組み、徐々にできるようになった。 ・50円、100円、150円を持っていると買える物はおよそ分かるようになり、50円で払ったときのおつりも暗算で分かるようになってきた。 ・最初の頃は、教科の買い物学習でできた金額と同じ金額で切符を買う学習をしてもできなかった。まだ、教科の学習と絵本を使っての学習が、結びついていないようだった。買うという活動を通して、できた、楽しかった、またやってみたいという気持ちで、教科の買い物学習と切符を買う学習を螺旋状に繰り返していくうちにつながりを感じ、それぞれ場面が変わっても次第にできるようになっていったと言える。 ・パターンにはまりやすいので、対応できるパターンを教科の買い物学習で増やし、絵本を使った切符を買う学習の中で、どのパターンを使えばよいかを考えさせ、体験において実際に使えるようになることを目指した。その結果、必要な硬貨を使うことについては、まだ、不確実だが、もう少し続けることで身に付けられそうな様子である。学習した範囲の金額を、実際の生活でも使える兆しが見えてきたと言える。 ・１月の作品展の買い物学習では、500円以内の買い物で、100円硬貨と50円硬貨で必要な硬貨を使っておつりのある買い物ができた。					

表2　言葉・文における取組

	言　葉　・　文		
ねらい	①自分で見付けたことや発見したことを進んで書く。 ②主語、述語、助詞、「、」「。」行替えなど、正しい表記の仕方を身に付ける。 ③生活の中で、言葉や文を単語を並べるだけでなく表現し、相手に伝えられるようになる。		
方針	・書くことに抵抗感をもたせない。 ・書いたものに誤りがあっても受け入れる。 ・マス目の用紙を使い、修正できるものについては児童の様子を見ながら修正の言葉がけをしていく。 写真５　右ページにマス目を入れて文を書いたミニ絵本		
取組	教科の学習	生活単元（絵本）	体験学習
	9/12～26・10/17 ・助詞のプリント「は」「を」「へ」 10/16 ・助詞のインターネット学習。（kANZAｿﾌﾄ） 言葉のつながり 「何がどうだ」「副助詞」「接続助詞」 11/15・11/30 ・主語、述語、形容詞、動詞など単語だけのグループを見て、必要な助詞を補い、順番を並べ替えて正しい文を組み立てる。	9/20～12/6 ・テーマの場所について、時間ごとに描かれている人々の生活の様子を、見たことや発見したことをもとに、相手に伝わるように話したり、文に書いたりする。 12/6～12/15 ・自分の一日を振り返る絵本を作るときに、話したり文に書いたりする。	・見たこと、体験したことを単語だけではなく文章として、より正しく表現できるようにする。 ・生活の中で、単語だけではなく、文章として表現できるようにする。 12/6～12/15 ・「ぼく・わたしのいちにち」の絵本作りで、読む人に伝わるように文を書く。
Aの変容と考察	指導前	・主語、助詞が少なく、必要な単語をある程度並べて思いは伝えられる。 ・助詞が正しく使えていない。 ・原因と結果、過去と未来が入った言葉に自分の願望も入り、ねじれてしまう。（鏡たたくとわれない。明日、ブランコしましたか） ・願いが断定や命令になってしまう。（「先生が買ってくる。」→先生に買ってきてほしい。「返せ。」→貸してほしい。）	
	Aの取組の様子	・教科の学習では課題が難しかったのか苛立つ様子が多く、あまり大きな変容は見られなかった。 ・絵本を使っての学習での態度面では、次第に慣れてくるに従って「やっていい？」と取り組みだし、見付けたことをたくさん発言し、確認をしながら「先にいっていい？」と２時間続きの学習の中の45分近い書く活動に集中して取り組み、いつでも真っ先に仕上げるまでになった。 ・自分の一日を振り返る絵本を作る活動で、勉強の時間について書く場面では絵本の絵を見て文を書くのが楽しいという意味で、「これが楽しいです。」と書いていた。 ・正確さという点については課題が残ったが、自分で見付けて進んで書くという態度面については変容が見られた。	

３ 体験学習の取組

(1)　お店やさんごっこをしよう

職員室で、前日に収穫した落花生の販売を行った。一袋10円で売り50円硬貨で支払ってもらいおつりを考えさせた。教科の買い物学習でも絵本を使っての切符を買う学習でも、50円硬貨で支払ったときのおつりの学習をしていたので迷わずにおつりを考えて渡すことができた。場面が変わっても学習した内容を使うことができたと言える。

(2)　遠足のお菓子を買いに行こう

電卓を使って、二つ足して150円までの物を選んで買った。よく商品を見て選び、50円と100円の物を選んだ。教科の学習や絵本を使っての学習の中で、50円、100円、150円で買える物の学習をしていたので、50円と100円を合わせると150円ということが分かってきて、体験学習での場で活かすことができたと言える。また、パンコーナーや魚コーナーなどで､商品の準備や陳列をしていて、絵本との共通点を見付けることもできた。

(3)　電車に乗って遠足へ行こう（秋の合同遠足）

行きの駅で切符を買う時に、財布から10円硬貨を抜いて、100円硬貨と50円硬貨だけにしておいた｡110円の切符を買うのに100円硬貨を取り出し、あったはずの10円を「10円下さい。」と要求してきた。「おつりをもらう出し方でいいよ。」と言葉をかけたら、150円を入れて買えた。帰りの時には10円硬貨を入れておき様子を見ていたら、迷わずに110円を入れて買えていた。切符の買い方については、絵本を使っての学習で、全く同じ形の券売機の模型で学習していたので、傍で見ていただけで、Ａだけではなくどの児童も迷わずに一人で買うことができた｡電車の乗り方についても、順番を守って並び、電車に乗ってからは騒がずに空いている席を自分で見付けて、自分で判断して座ることができた。学習してきたことを、体験の場で活かすことができたと言える。

(4)　近くのお店の探検に行こう

パンやの見学では150円で買えるパンを選んで買うことができた。それは、教科の買い物学習や

切符を買う学習でも取り組んできた成果と言える。また、みんなで分担して質問をすることで、パンやは絵本で見たのと同じように、朝早く起きて準備をしていることや、絵本と同じようにパンを焼く機械からほかほかの食パンが出てきたことを見ることで、絵本で見た世界と実際の世界の共通点を見付け、絵本で見た世界を実感として味わうことができたと言える。

Ａは、帰り道に何度も「絵日記を書きたい。」と言っていた。学校に帰り、絵日記を書く時には、にこにこと笑いながら「うれぴーだぞ」と叫んで、文に表したい気持ちを表現していた。

(5)　バスに乗って商店街の探検に行こう

前橋の中央通り商店街へ出かけ、開店前の準備や開店後の様子を見て、絵本で学習したことと同じ場面、共通点をたくさん見付けて帰ってきた。

Ａはしおりの地図を広げて、自分で商店の場所を確認することができた。絵本と同じように、やおやの仕入れのトラックが止まって、店先に野菜を並べているのを見付けたときには、穏やかでうれしそうによい表情をして笑っていた。ここでも、絵本で見た世界と実際の世界の共通点を見付け、絵本で見た世界を実感として味わうことができた。

(6)　「ぼく・わたしのいちにち」絵本を作って発表し合おう

絵本を使っての学習で取り組んできたミニ絵本と同じ形で、自分の一日を振り返る絵本を作った。平日を設定して、学校にいる場面は授業中に作り、家庭にいる起床、朝食、登校、夕食、入浴、就寝の時間や場面については家庭に協力してもらって作った。

Ａは、朝食の時間、家を出る時間については自分で言うことができた。最近では、ふだんの生活の中でも時間の意識ができ始め、チャイムや、時計の針を気にして行動しようとする場面が増えてきている。

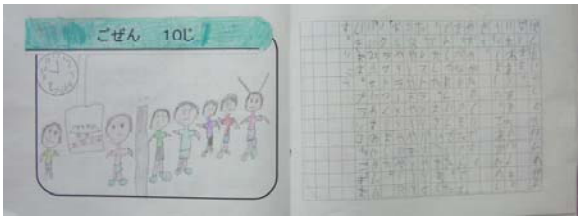

写真6　ミニ絵本と同じ形で書いた「ぼく・わたしのいちにち」

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

1　クラスの児童の様子

５月の頃のＡは、学習の気配を感じると、「俺は勉強は嫌いだ。むかつく。」と叫んでいたが、最近では絵本を使った学習に関連した物を持っていると、興味がある様子で寄ってきて、準備を手伝ったり、「ありそ町するん？」と聞いてきたりするようになった。率先して準備をし、どの活動も手を抜くことなく取り組み、真っ先に仕上げている。11/30には、学習が始まるチャイムがなると、「休憩コーナー」から立ち上がり「先生、勉強の時間だよ。」「みんなー、勉強の時間だよー。」と呼びかけて、真っ先に机の前に座った。

このように、学習面だけではなく、態度面から見てもかなりの変化が見られるようになった。

また、Ａ以外のクラスの他の児童については、次のような変容が見られた。

Ｂは、字を読む、書く、絵の形をとることが難しい児童であったので、他の児童とは違う目標を定めた。ひらがなの練習や10円～30円までの学習に取り組んだ。1学期には、練習してもなかなか変容が見られなかったが、11月の終わりに遊びの中で、「やおや」「さかなや」「幼稚園」など分かる絵を描き、「やおや」と読める看板も書いてあった。その頃から、絵本の中のお店の看板を「これは？これは？」と聞くようになり、書いている文字の表す音に興味が出てきて、３学期には文字が少し読めるようになってきた。金銭についても考えながら必要な金額を出せるようになってきて、金種の違いも分かるようになってきた。

Ｃは、絵本をよく見つめ、発見したことをよく発表していた。家族と外出した時も、興味をもって周りを見ている様子で、「交番があったよ。おまわりさんがいた。」と、絵本と実際の世界の共通点を見付けては話していた。文の正確さにはまだ課題が残るが、１学期に比べてあまり時間をかけずに、たくさんの文を書けるようになった。金銭についても100円までの買い物であれば、支援の道具を使っておつりも考えられるようになってきた。

Ｄは金銭に関してはめざましい進歩を見せ、50円が入ると全く分からなくなってしまった状態から、金額によって、50円、100円、150円を使いこなし、おつりも暗算でできるようになった。合同遠足の前には「伊勢崎まではいくら払ったら行け

るの？」という質問をしてきて、生活に結びついてきた様子が伺えた。文を書くことについては、想像を膨らませ、回を重ねるごとに物語風に書くようになっている。

Ｅは､Ｄと同様に金銭を自由自在に使いこなし、想像を膨らませて物語風に文を書けるようになった。探検の場所が終わるたびに作っていたペーパークラフトを、市販の道路や公園などが描かれているシートの上に並べたときには、「本当の商店街みたい」と喜んでいた。

写真7　ペーパークラフトで作った商店街

２　研究のまとめ

以上のように、それぞれに違いはあるが、一人一人にねらいに近づく変容を見ることができた。

この活動の中で、どの児童も「先生楽しい。」「またやりたい。」「ありそ町やらないの。」という活動を楽しむ発言があった。「できた。」「すごいね。」「分かってきたぞ。」「やり方が分かったから自分でやってみる。」という達成感を感じ、確かめ認め合う言葉も出てきた。個人で学習に取り組むよりも、クラスの友達とかかわり合い、共に活動をすることで成果を認め合い、連帯感の中で助け合い、教え合うことを通して個々の変容が見られたと考える。

活動に取り組み始めた９月の最初の頃は、教科の学習ではできたことが、絵本を使っての生活単元学習では全くできなかったことが何度もあり結びついていなかった。しかし、「できた。分かった。またやりたい。」などの楽しさ、達成感、意欲を感じ、「やり方が分かってきた。できるかもしれない。」という見通しがもてたときに、自分から進んで取り組めるようになったと考える。このように三つの学習を繰り返していくうちにそれぞれがつながり、相互に確かなものに高め合い、螺旋的な繰り返しとなっていったと考える。そして、場面が変わってもこれまで学習してきたことを活かせる力に高めることができたと言える。

これはＡだけではなく、クラスの他の児童にも言える。それは、児童の実態に合わせた個々の目標や、支援の工夫、活動の内容などを柔軟に対応させ、全体としての目標や活動の流れを構成することができたためと考える。

３　今後の課題

生活に活かせる力に高めたい要素で一番伸ばしたい部分であった「言葉・文」についてはなかなか変容が見られなかった。本人にとっても書くことが一番つらく感じる活動であったこと、教科の学習での計画が実態に合っていなかったこと、そのために絵本を使っての活動にもうまく結びつけられなかったことが要因と思われる。

また、変容が見られた、「金銭」や「時間」のように「何分になったら休み時間」「できるようになったら買い物に行こう」など楽しみにできる目標と結びつけられなかったこと、生活の中で、単語だけの会話で伝わらない不自由さを感じていなかったことも考えられる。

そこで、「言葉・文」の目標については「正確な表記」から「書こうとする意欲がもてる」へと変更した。その結果、正確な表記としては課題が残るが、書くことに対して、自分で見付け進んで書こうとする姿勢は見ることができた。今後「正確な表記」を身に付けさせていくためには、①楽しみにできる目標と結びつける②自分で結果がわかり修正できる実態にあった教材や活動を組む③ゲームなどで楽しく繰り返す中で、身に付けられるような活動を組む④単語だけの会話の不自由さを感じる場面を設定するなどが考えられる。

成果が見られた「金銭」や「時間」などにおいてもさらに教科の学習の中で深め、体験で使える範囲を広げていく必要がある。「金銭」については数の大小と金銭を結びつけ､使える金額を広げ、日常的に生活の中で使えるようにさせたい。「時間」や「マナー」についても日常的に意識して生活できるように会話や行動の中に常に取り入れていきたい。そして、この学習が終わった後も、忘れずに身に付けていられるための指導の工夫を考えていかなければならないと考える。

（担当指導主事　中村　健）

Web検索キーワード
【生活単元学習　絵本を使った学習　教科の学習　体験学習】

＜参考文献＞

・大南　英明　　吉田　昌義　　石塚　謙二　編『障害のある子どものための国語～個別の指導計画による読むこと書くこと～』　東洋館出版社(2005)